LL ニュース

No. 26

February 25, 2003　　愛知大学豊橋語学教育研究室

特集　―東南アジアのことばと文化―

すべての道は東南アジアに通ず

タイ国ロッブリー県にある17世紀の宮殿の門。
この宮殿には、フランスのルイ14世紀の外交使節団も訪れた。

CONTENTS

◎特集　―東南アジアのことばと文化―
- ミャンマー語の世界（伊東利勝）…… 2
- 東ティモールの言語事情（佐藤元彦）…… 4
- ベトナム語を学ぶ楽しみ（細井佐和子）…… 6
- タイはいいゾウ!!（加納　寛）…… 8
- 遥かなるジャワ（河野　眞）…… 11

◎私の中国語教授法（上野由紀子）…… 12
◎ロシア映画への招待
　―コーカサスの虜―（清水伸子）…… 14
◎私の外国語修行時代（磯野　徹）…… 16
◎ LL Tea Time
- 森田正幸的地図（森田正幸）…… 17
- チェコの復活祭（松本友紀）…… 18

◎公開講座「言語」2003プログラム …… 20
◎外国語検定試験合格者に奨励金を贈ります！…… 20
◎お知らせ…… 20

ミャンマー語の世界

文学部
伊東利勝

ミャンマー語はミャンマー連邦内の共通言語である。だからミャンマー語ができるようになると東南アジアの西部に位置するエーヤーワディー川流域地方に暮す3,500万余の人々と話ができるようになる。つまりミャンマー語はミャンマー人だけが使用しているのではない。国内に住む多数のマイノリティー（少数民族）も、必要に迫られてこの言語を使う。だからシャン人、カレン人、モン人、チン人などの中に入っていくことも不可能ではない。また東京や大阪、そして名古屋にも、多くのミャンマー人が生活している。

彼等の中で培われてきた渡世の知恵、世界の観方、人間心理の解明方法などには興味をそそられるものが多い。もちろんすべてがそうという訳ではないが、まったく違った考えや生き方に出会えることは確かである。例えば苗字がない。家のお墓がない。したがって祖霊崇拝がない。だから夫婦別姓問題などない。家族や友人は、悠久なる魂の遍歴過程でたまたま出会えた別の魂にすぎないという考え方があるからであろう。

富の観念からしても、理解に苦しむ。貯蓄も地位も名誉も、現世での意味しか持ちえないという。来世へと続く魂を豊かにするのは、徳のみである。だから富はすべて、徳に変換して魂の糧とする。功徳を積むという行為にこぞって励むであろう。

歴史もまた面白い。エーヤーワディー川流域中部の中心にパガンという町がある。ここは11世紀から13世紀の末まで流域一帯を支配した権力の中心があった。現在の町はそれほど大きくないが、見渡す限りレンガで造られた寺院、窟院、仏塔（パゴダ）などの重厚な宗教施設が２千以上も残る。大半は廃墟だが、その壮大なパノラマに圧倒され、言葉を失う。東南アジアに残る三大仏教遺跡のひとつと言われている。

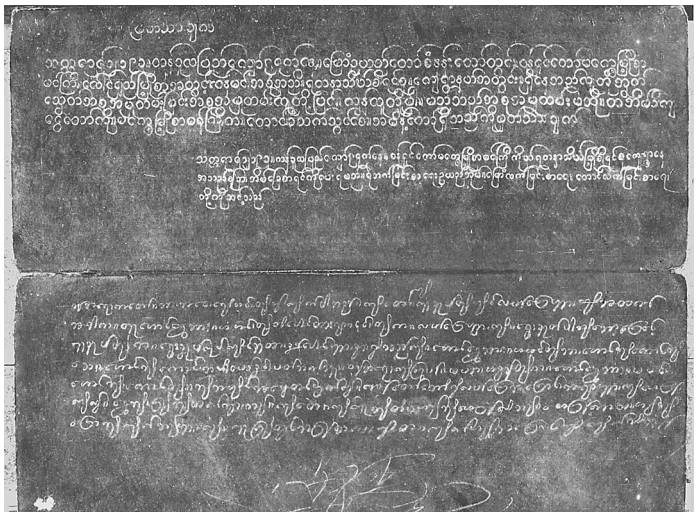
実はこのパガン、平均年間降雨量が600ミリぐらいしかない。これが6月から10月にかけての雨季に降るだけで、あとは少々大げさに言えば、一滴の恵みもない。もちろん周辺もそうで、中部ミャンマー一帯が、平均で1000ミリを超えることはない。稲作をはじめとする農業は安定せず、つねに凶作・飢饉の影が付きまとう。

ところがである。ミャンマーの王朝文化はこのようなところに花開いた。パガン朝（1044–1287年）から18世紀に成立するコンバウン朝（1752–1885年）まで、権力の中心は常にこの乾燥する中央地帯に中心軸を置き続けてきた。いっぽう海岸部にある現在の首都ヤンゴン付近は雨が多く、稲作に適した環境にある。ここを中心にエーヤーワディー・デルタ地帯が開発され屈指の米産出国となったのは、イギリスの支配下にはいった19世紀中期以後のこと。東南アジアでもっとも乾燥し、安定した農業が不可能なミャンマー中央地帯に、何故に強力な政権が存在し続けたのか。これはミャンマー史、いや東南アジア史最大の謎といってよい。

たぶん自然との付き合い方や社会の仕組みが、今とは違っていたのだろう。そうした知恵を学んで日本のそして世界の今を切り開きたいと思う。その手立てはいくらでもある。このエーヤーワディー川流域地帯には、文書史料が豊富に存在するからである。この豊かさは、中国を別にすれば他のアジア世界には例をみない。ミャンマー文字はモン文字を手本にパガン時代に形成された。この頃から僧院教育が普及したことにより、男子の識字率は堅調に推移したとみられる。ずっと後の話だが、1881年イギリスが行なったセンサスでは、識字率（読み書きができるか目下勉強中の人の割合）は46.06%、これは同年のイギリスが10.8%であったことを見れば、その高さに驚く。

パガン時代から18世紀までは金石文しか残っていないが、それ以後になると、ペーザー（貝葉書）やパラバイ（折り畳み書）が利用できるようになる。ペーザーは多羅樹やオオギヤシの葉を加工して作る。主としてお経が書かれるが、年代記や仏塔・城

市・村等の縁起の類、慣習法典、王室から地方役人に下された辞令、薬方などもある。いっぽう細長い厚紙を交互に折り畳み、これに墨を塗って黒くし、その上に細い滑石で文字が書いてあるものをパラバイという。つまり黒板にチョークで字を書く要領である。白い紙のものもあるが、黒色パラバイが主流であった。ペーザーと異なり、上から墨を塗れば何度も書き直しがきく。一種のノートブックであるから、宗務関係、中央・地方行政関係、裁判関係、法令関係、製薬・医療関係、個人の貸借・売買関係、詩文、占星術など、宗教および国家行政から民衆生活全般、文学にまで、何でも書いてある。



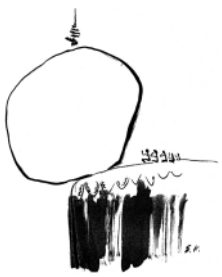
パラバイ文書

民事裁判記録（ピャットウン）の一例を紹介しよう。18世紀末のこと、ある町の判事に、「フンゲッ *Hnget*」という名を「ンゲッ *Nget*」と呼んだと訴えた者がいた。被告は「ンゲッ」だから「ンゲッ」と呼んだまでだという。これに対して判決は、被告はシャン人で、シャン語には *Hnget* という音がなく発音できない。よって被告は無罪。訴訟費用は原告、被告は和解費用を負担することになった。という具合にもめ事の内容および両者の言い分、裁定内容等が具体的に描かれている。この記録によって我々は年代記や勅令などではうかがいえない社会の姿を想像することができる。

それに1942年から45年までミャンマーの地に住む人は、日本によって支配されるという経験をもっている。日本軍はイギリスからの独立を助けるという名目で侵入し、住民を踏みにじった。その傷跡は今も残っているし、記憶は再生産されている。当時の日本、そしてこれからの日本のあり方を考えるとき、彼等の言葉は限りなく重い。

このように広がりだけでなく相当の深みもあるミャンマー語の世界を開くことは、日本語が話せる人には、それほど難しくない。それはシンタックスが同じだからである。膠着語系に属し、語尾を変えることにより、疑問、否定、未来、命令などが表現できる。余談だが、だから日本式英語もミャンマー語を話す人にはよく通じる。現在の文字は円を基本とした形で、ローマ字表記のように子音字と母音字が分かれている。核になる字母を中心に、その上下左右に母音符号や声調符号などを付加して、音節を表記する。従ってその法則さえ覚えれば、文字の読み書きができるようになるまでそれほど時間はかからない。日本語世界で、漢字のテストが大学入試まで続くことを思えば、簡単である。

ただ問題は会話である。日本語の語順に従い、次々に単語をミャンマー語に変えてゆけばよいのだが、ミャンマー語には無声無気と無声有気と有声（無気）の対立、歯間閉鎖音、それに4つの声調がある。これがなかなか難しい。しかし現地では、いろいろな民族のミャンマー語が飛び交っている。この世界は英語もある程度通じるし、度胸さえあれば、何とかなる。



（カット：河野 眞）

東ティモールの言語事情
―二つの公用語とインドネシア語のはざまで―

経済学部
佐 藤 元 彦

インドネシアのジャワ島の東には、バリ島をはじめ、小スンダ列島の小さな島々が並んでいるが、その東方にある、やや大きな島がティモールである。「東ティモール」（正式な国名は東ティモール民主共和国）は、この島のほぼ東半分と、北西部の小さな飛び地とからなる、陸地面積1.5万平方キロメートル（日本の四国よりひとまわり小さく、長野県よりやや大きい)、人口78万7千人を擁する新興国である。ディリ虐殺事件（1991年11月）をはじめとして数十万人に及ぶ犠牲者を出しながらも、国連の仲介によって、ようやく昨年5月20日に独立を「回復」した。ここで、「回復」という表現を用いたのは、多言するまでもなく、20数年前に一度独立宣言が発せられていたにもかかわらず、それが昨年5月まで踏み躙られてきたという経緯があるからである。ほぼ400年にわたってポルトガルの植民地であった東ティモールにおいて、本国での民主化の進行に伴って、独立が模索され始めたのが1974年。翌75年11月28日には独立が宣言されたが、その直後に、インドネシアへの併合を主張する一部の人々の動きに呼応して、インドネシアが軍隊を派遣し、27番目の州として強引に併合したのであった。

ところで、独立の「回復」に先立って制定された憲法では、公用語をテトゥン語およびポルトガル語の二つにすることが定められた（第13条)。マライ語の系統に属するテトゥン語は、東ティモールの人々によって長らく日常的に使われてきた。ブナク語、ケマク語、マンバエ語など30以上に及ぶ地域言語が用いられている中で、いわば「共通語」としての役割を果たしてきたとも言える。そして、ポルトガル語は、いうまでもなく植民地本国の言語である。東ティモールでは、これら以外に、英語や「併合時代」に強要されたインドネシア語もよく使われてきた。実際、独立達成までの2年余りに及ぶ国連暫定統治（UNTAET）時代には、テトゥン、インドネシア、ポルトガル、英の4つが「公用語」とされてきた。

とはいえ、東ティモールの人々が皆、これらの4言語に長けている訳ではない。UNTAETが行ったある家計調査では、使用言語について興味深い結果が示されている。それによれば、東ティモール人の82%はテトゥン語を理解できるが、インドネシア語についてはその比率は43%、ポルトガル語、英語に至ってはそれぞれ5%、2%しか理解できる人がいないというのである。歴史、普及・定着度からしてテトゥン語を公用語としたのは当然だとしても、そしてまた、独立を踏み躙ってきたインドネシアの言語を公用語としなかったのは十分に理解できることだとしても、なぜポルトガル語をも公用語としたのか。大方の説明は、テトゥン語の文法は体系性に欠け、公用語としては必ずしも適切ではないというものである。

それどころか、最近の動きとして注目されるのは、ポルトガル語の一層重視である。例えば、政府は、2005年までに小学校教育をすべてポルトガル語で行うという方針を明らかにした。さらに、その後、中・高等教育のポルトガル語化を進めることも予定されているという。インドネシアによる併合以前のポルトガル統治時代に教育を受けた人々の眼には、こうした動きは好ましく映っているようだが、その後に教育を受けた人々にとっては、むしろインドネシア語の方に慣れがある。公用語に指定されているにもかかわらず、ポルトガル語を全くの「外国語」として修得しなければならない30代､40代の「中堅」は決して少なくないはずである。そうした人々の中には、さらに、インドネシア占領時代には使用が一切禁止されていたテトゥン語も「外国語」であるような人もいよう。そのような人々の間では、最近、公用語の修得に対する不安と不満が急速に広がっていると聞く。

他方で、東ティモールへの支援を続けている諸外国の中には、短・中期的に国づくりを担っていくそうした世代においてインドネシア語が支配的であることを事実上踏まえた対応が珍しくはない。日本の

対東ティモール援助の枠組みにも、そうした点が示されている。筆者は、昨年3月にゼミの学生と共に、首都ディリにある国際協力事業団（JICA）の事務所でヒアリングを行う機会を得たが、その際に明らかにされたのは、対東ティモール援助に関しては、マレーシアによる南南協力を一つの柱にするというものであった。南南協力とは、周知のように、日本の援助によって発展した発展途上国に蓄積された人材・ノウハウを他の発展途上国の発展に役立てようという近年の日本の対外援助における「目玉」の枠組みであり、タイによるインドシナへの協力などが実績として積み上げられてきた。東ティモールに対しても、日本政府の資金を用いてマレーシア人による技術等の指導を行いたい、というものである。ところで、マレーシアが選ばれたのは、マレーシア語がインドネシア語に非常に近いという点が斟酌されている。短・中期的に国づくりを担うであろう世代でいかにインドネシア語が支配的だといっても、インドネシアに対する反感がなお根強い中では、インドネシアによる南南協力という枠組みは考えがたい。そこで、インドネシア語に極めて類似した言語が使用されているマレーシアによる枠組みを考えた、ということであろう。経済発展の度合いという意味でインドネシアよりやや進んでいるという点も、こうした枠組みを考える上で配慮されたと推測される。

ともあれ、一方では、公用語の「普及」、徹底化を目指した動きがあり、しかも、その中では外来語であるポルトガル語重視の姿勢が顕著になってきている。しかし、他方では、インドネシア語が事実上「使える」言語になっているとして、それを踏まえた内外の動きがあるという、実に複雑な言語事情が東ティモールを目下覆っている。多くの小国の経験が示しているように、このような中では、複数の言語を自由に操る「国際人」が多く育つ可能性があるが、他方で、言語という次元で、一国民としてのアイデンティティをどのように確立していくのかという点は、大きな課題として残ろう。インドネシアからの分離・独立（インドネシア不当占領からの独立の回復）がアイデンティティの形成に大きく関係した時期が終わりに近づき、日常の生活基盤の上にアイデンティティを形作っていかなくてはならないこれからの過程において、こうした複雑な言語事情がどのような展開を見せていくのか、目を離せないところである。

インドネシアからの分離・独立の過程で併合派によって破壊された首都ディリ中心部の保健センター
（2002年3月18日に佐藤ゼミ生の森谷さんが撮影）

ベトナム語を学ぶ楽しみ

国際問題研究所　客員研究員
細　井　佐和子

ハノイでは思わずふり返りたくなるような清楚な美しさの女性にすれ違うことがたびたびあります。また優美でしなやかな身のこなしはベトナム女性の魅力の一つです。その女性たちが市場や道端での買い物では一転して、きびきびした、激しい身振りも伴ってたくましく値段の交渉をはじめます。本当にベトナムの女性は生活力にあふれています。それは二千年の昔からそうでした。

ハノイなどベトナムの都市には、詩人や教育者、愛国者などの名前がつけられた通りがたくさんあります。Hai Bà Trưng（ハイバー・チュン）はその一つです。Trưng Trắc（チュンチャ〔ク〕・徴側）は土豪の家の出身で武芸に堪能でした。中国の後漢に支配されていた紀元後40年、彼女は夫を後漢の太守に殺害されて反抗ののろしをあげ、妹のTrưng Nhị（チュンニ・徴貳）とともに戦って勝利し、王位につきました。翌年には漢朝が討伐軍を派遣し、チュン姉妹の軍は追いつめられ、43年に二人は斬首され（河に身を投げたとも）、この反乱は収束しました。

Hai Bà Trưng（ハイバー・チュン）のhai（ハイ）は数字の2の意、bà（バー）は女性の敬称で本来は祖母の意です。漢字「婆」のベトナム語発音です。一般にチュン姉妹と訳されていますが、これでは敬称がうまく伝わっておらず、残念です。ハイバー・チュンは神として祭られました。その愛国的行為が讃えられ、現在も命日には記念の祭礼が行われています。

外国人の女性は敬称としてこのbàで呼びかけられることもありますが、お婆さんといわれているのかなどと気分を害してはいけません。男性にはông（オン・翁）という敬称がつきます。本来は祖父の意です。

あなたという呼びかけは親族名称から転化した名称が使われますが、このôngとbàはその一つです。若い男女には、anhとchị（アイン・チ、本来は兄・姉の意）が使われます。恋人や夫婦の間ではanhとem（エム，年下のものの意）で呼びあいます。日本の妹兄（いもせ）と同じですね。このように、日本語とベトナム語には重なり合う言葉がとても多いのです。

ベトナムは中国に隣接し、千年余に及ぶ支配を受けたため、あらゆる面に中国の影響があります。当然ながら、中国からの言葉が多く入っています。また近年に日本から入った言葉もあります。美術、科学、哲学などの言葉は日本が欧米の言葉を翻訳したものが中国を経由してベトナムに入ったのでしょう。現在はカラオケ、ザッカ（雑貨）などと書かれた看板も見かけます。先年久しぶりにハノイを訪れましたがオートバイの洪水で、歴史の残る町並みを自転車でのんびり回れたハノイは過去のものになっていました。騒音とでもいいたくなるほど大きく音楽を流している商店街もずいぶん小奇麗になりました。英語やハングルの看板が目立ち、以前はみかけた漢字の看板は今では神社仏閣でしかみあたりません。

現在のベトナムでは、ローマ字化されたベトナム文字を使用しています。私の友人達は漢字を廃止してローマ字化に成功したことを大変自慢します。私も子供のころ漢字を無理やり覚えさせられた経験から漢字に対して愛着をもっているとはいえませんが、ベトナム人のように「一柱寺」の漢字も読めないようになるのはどうかと思います。20世紀初頭まで、ベトナムの知識人は漢字と漢字を基にした字喃（チュノム）文字を使用していました。漢字・字喃の廃止の結果、これまでに残された膨大な歴史的・文化的遺産が次世代に継承されにくくなっています。もちろんこれに対応する動きもありますが、一般市民の間での動きは乏しいようで残念です。

ともあれ、私たち外国人にとっても確かにローマ字化されたベトナム文字は学びやすい。また、ベトナム語に含まれる漢語もローマ字化されているので、発音すれば元の漢字が推測できるものがかなり

あります。例えば、nhật ký（ニョッ〔ト〕キー）は「日記」のベトナム語発音で、日記の意です。kýが「き」の音を持つ漢字のベトナム発音であるとすれば、kỷ niệm（キーニエム）が「紀念」であると音から納得できませんか。付け加えれば、「日本」は Nhật Bản（ニョッ〔ト〕バーン）といいます。日本語を母語とする私たちにとって、漢語という共通の語彙を持つベトナム語はとてもわかりやすく、親しみやすい言葉なのです。苦労して覚えた漢字の知識をここで発揮できるのです。利用しない手はありません。

しかしここで注意すべきは、この二つの ky は異なる表記であることです。これは声調の違いです。声調を日本語で示すことは困難です。現在のベトナム共産党書記長は少数民族 Tày の出身です。〔ベトナムは54の民族からなる多民族国家で、8割以上を占めるのが Việt（ビィエ〔ト〕）族です。この民族の言葉が、狭い意味でのベトナム語です。〕新書記長が選出された時、日本の新聞はタイ族出身と紹介していましたが、これはどのタイ族だろうかと思いました。ベトナムには Tày と Thái があり、タイーとターイにわけて示すこともありますが、結局のところ正確には表しきれません。この違いは声調と t, th の発音の違いです。

声調とは、例えばため息をつくとき「あぁあ」と上がり下がりするような抑揚です。中国語では四つですが、ベトナム語には六つあります。この多くの声調こそが、ベトナム語を非常に音楽的な言葉にしているのです。そしてベトナム語を学ぼうとする者の前にたちはだかる最大の難関です。

私が初めてベトナム語に接したのは20年以上も前のことです。当時は東海地方ではまったく学ぶ場所がなく、ようやく入手したテープから６つの声調が流れだしたのを聞いて、どうしたものかととほうにくれたことを思い出します。今ではテキストやCDも書店に並べられ、社会人を対象とした講座も開設され、ベトナム語の授業がある大学もあります。私も社会人を対象とした講座を担当していますが、受講生はとても熱心です。受講の目的は様々ですが、ベトナムを訪問してとても気に入り、ぜひとも直接会話をしたいという方が多い。また将来自分の仕事をベトナムで役立てたいという方もいます。どうしてそこまでベトナムが気に入るのでしょう。

料理や熱帯の果物のおいしさや喧騒に満ちた町や市場、のどかな田園、私たちとよく似た顔だちや体型の人懐っこい人々……　日本の旅行者は口々に並べます。ベトナムへの旅は名所旧跡を回る旅ではないのでしょう。人々との触れ合い、肩のぶつかりあい、値段のかけひきなのですから、団体旅行ではなく、個人や少人数でいく方が多いのも当然です。

ハノイやホーチミン市などの一部の人間をのぞいて、ベトナムは大多数が農民でまだ貧しい生活水準です。独立以降の長い戦争の後遺症があちこちに残っています。それでも、人々は口数多くだらだらと、しかしたくましく、粘り強く生活しています。ハノイの長くて湿気の多い暑い暑い夏、小雨が連日続くべっとりとしてうす寒い冬の両方を経験すれば、あせらずさわがす、耐えて好機を待つ人々の性格が少し理解できます。

ハノイで最も良い旅行の時期はとの私の問いに、ベトナムの友人は10月か11月だろうと教えてくれました。一年中暑いホーチミン市とは異なり、ハノイのそのころはしのぎやすい気温です。市の中心地にある湖の回りを散歩すれば、人々は外国人だとすぐに見取って声をかけてくることも度々です。最近は英語で話しかけられます。ベトナム語でぜひ返事をしてください。その瞬間、相手の顔に驚きと嬉しさがあふれます。その一瞬を楽しみに私達はベトナム語を学ぶのでしょう。

タイはいいゾウ‼：

タイの言葉と文化

国際コミュニケーション学部
加　納　　寛

「タイって、ど〜〜〜こだ？」

「アフリカーーー‼」

「どうして〜〜〜？」

「象がいるからーーー‼」

ときどき、そんな会話を耳にします。

そう、タイには象がたくさんいます。「よく知ってるねー、お嬢ちゃん‼」といいたいところですが、アフリカにいる象はアフリカ象、タイにいる象はアジア象、全然違います‼（象さんが好きです、でもキリンさんももっと……　タイではキリンさんは動物園にしかいません。それもアフリカとは違うところです。なお、タイの人々は日本人と同じアジア系ですから、顔つきも似ています……もとい、比較的似ています。タイ人に言わせると、日本人は目が細いんだそうです。タイ人から見て典型的な日本人顔に見えるらしい筆者も、よく眠りながら歩いていると思われています。）

大学生にもなって冒頭のような会話をしていてはいけませんよ‼　ねえ、○○さん。

タイは、象さんの頭のようなかたちの国土をもっています。東南アジア大陸部のほぼ中央に位置し、西はビルマ（ミャンマー）、東はラオス、カンボジア、南はマレーシアに囲まれています。南（象さんの鼻に当たります）はマレー半島に突き出していますから、西はアンダマン海、東はシャム湾に面し、美しい海岸線を見ることが出来ます。

タイ地図
象さんの顔に見えるかな？
（注意：まゆ毛、目、口は地図に書き加えたものです。本当はありません。）

タイに一度足を踏み入れた人の多くは、タイ・ファンになって帰ってきます（ドン・ファンではない）。その中でさらに症状の重い人は「タイ中毒」にかかります。こうした人は、タイ語を勉強しなければならない体になってしまい、遮二無二タイ語講座を探しまわることになります。何を隠そう、かくいう筆者も「タイ中毒」にかかった一人です。ま、そのおかげで、こんな文章を書いているのですが。

実は私は、「タイ中毒」にかかるまでは、中国語を第2外国語とし、考古学を専攻するまじめな学生でした（今でもまじめですが）。その頃は、世界で最も美しい言語は中国語だと思っていました。NHK 中国語講座で北京電視台の女性アナウンサーが話す澄んだ中国語は、この世のものとは思えない美しさでした。あとになって、あの澄んだ中国語は、アナウンサー特有のものだと知ったのでしたが。市場のおじさんやおばさんの話す中国語ときたら……（以下省略）。そんなある日、私には憧れ

の中国へ行く機会が舞い込んできました。ところがところが、初の海外旅行の準備にいそしんでいた私の目の前に、何の因果か「天安門事件」のニュースが飛び込み、中国旅行は泡と消えてしまったのです（オー・マイ・ブッダー!!）。その代わりに行ったのがタイ。行ってみてビックリ。何と、タイ語は中国語より美しかったのです!!（注意!! このあたりの記述は筆者の主観に基づいています。）タイ語は、アナウンサーはもちろん、おじさん、おばさん、くそがき（失礼!! でも、野原しんのすけ君は、日本語で話すと小憎ったらしいガキだけど、タイ語で話すととてもかわいいボッチャンになるのでした）、誰が話しても美しかったのでーーーす!!

なぜ、タイ語が美しいと感じたか、その秘密のひとつは、声調にあります。タイ語には5つの声調があります（中国語は4つ）。これが、その柔らかな繊細さを伴う音楽のような響きを醸し出すのです。また、どちらかといえば適度な高音（これも主観です）で話す人が多いことも、タイ語の優美な音感を醸し出す要因の一つだろうと思います。「えー、どんな感じだろう？」と思ったアナタ、そうアナタ、ぜひLL自習室でテープを聴いてみてください。私の言うことが実感できる……かもしれません。「これは語学学習用のテープだから、きっと発音が特別にきれいなんだ、実際に話されている言葉はこんなにきれいじゃないかもしれない……」と思った鋭いアナタには、実際にタイに行ってみられることをお勧めします。何事も体感が第一ですから。（実際にタイに行ってみて「タイ中毒」にかかってしまった方には、本学のタイ語の授業が用意されています!! なんと準備のよい大学でしょう。）

タイというと、冒頭の象さん以外に何を思い出すでしょうか？　学生さんたちに聞いてみると、仏教、微笑、タイ料理、タイ・マッサージ、タイ・シルク、美しい海といった答えが返ってきます。観光のイメージですね。

仏教は、たしかにタイでは大きな影響力を持っています。国民の約95％が仏教徒です。男性の中には、一生に一度出家する人も数多いです（タイでは、女性は正式な僧侶にはなれません）。お坊さんは、厳しい規律の中で生活します。たとえば、お坊さんは結婚することはもちろん、異性に触れることもできません。これは誇張ではありません。女性と物品の受け渡しをするときには、男性が媒介するか、布を使って、直接受け渡しをしないようにします。女性の方、タイに旅行してお坊さんにあったら、触らないように気をつけて下さいね。バスでもお坊さん優先席があります。国内線空港のロビーでもお坊さん専用席があります。空いているからといって、間違って座らないようにしましょう。王様でも、お坊さんには頭を下げます。

こう書いてくると、タイの人たちはきっと日本人とは比較にならないほど敬虔な人たちなのかと思われるでしょうが、実際の信仰活動には、それほど差異はありません。よく、日本人は初詣に神社に行き、結婚式はキリスト教式で、葬式は仏教式だから、「無宗教」なのだといいます。でも、タイの人たちだってとても柔軟に仏様以外の神様とも接しています。違いは、日本ではその柔軟性を「無宗教」と呼んでしまうのに対して、タイではそうした柔軟性まで含めて「仏教信仰」と呼ぶところにあります。

微笑（タイ・スマイル）については、実際に行って見てきてください。あなたの心がけと運次第で、実物を目にすることができるでしょう。手っ取り早く見たい人は、筆者の研究室に来るか、授業をとると、心がけ次第で写真のようなスマイル？を見ることができます（とくにあなたが宿題を忘れた言い訳をする時）。

タイ・スマイル？

タイ料理は、味がはっきりしていて、そうした味覚を持っている人はハマリます。日本で食べると、少し値が張るのが欠点です。辛さに弱い人にもそれなりの料理があるのがタイ料理の奥深さです。

辛いのが苦手な方には、朝はお粥、昼は麺、夜はチャーハンを奨めます。これはこれで、とても美味しいです（安いし）。カレーでも、ココナッツ・ミルクが入っているものが多いですが、味がまろやかになって食べやすいものです。もちろん、「辛くなければ美味しくない」という、自分の胃壁を地道に破壊している奇特な方には、それなりの激辛料理が待っています。私の経験でいえば、日本人の約43.6％は、タイ料理にこれでもかっ!!と入っているパックチー（香菜）が苦手です。ある友人は、「カメムシを噛み潰したような」と表現しました。カメムシはとても美味しいのでしょうね（食べたことないけど）。また、私の経験上、日本人の約38.1％は、果物の王様といわれるドリアンが食べられません。まずいものは石油を食べているようでまずいですが（石油はきっとまずいと思います）、おいしいものは天にも昇る美味さです。癖になります。これらを味わえるようになると、タイに住みつきたくなるでしょう。

タイでは、マッサージやシルクも、堪能できますね。マッサージ学校のあるワット・ポー寺院では、涼やかな東屋で、マッサージを施してもらえます。シルクも豊富で、その気になれば短時間で服を仕立てることもできます。海…、これは実際に見てきてください。泳いでみるとさらによいでしょうね。なお、せっかくタイに行ったのなら、遺跡もお勧めです。世界遺産に登録されたアユッタヤーやスコータイは、それはそれは美しいです（暑いけど）。象さんに乗ることもできます。

遺跡にいる象さん

このように観光的イメージが強いタイですが、日本とは政治的にも経済的にも強い結びつきがあります。とくに経済面では、何千という日本企業がタイに進出しています。皆さんが就職して、「キミ、明日からちょっとタイに行ってくれんかね」といわれる可能性も、まんざら低くはないと思います。そんなとき、タイの言葉と文化について、ある程度の知識があったなら、きっと仕事もよりスムーズに進み、より豊かな人間関係も築けるでしょう。

愛知大学は、タイ語やタイ文化についての授業を持つ、数少ない大学のひとつです。LL 自習室にも、タイ語の映画や音楽、教材などが溢れています（映画は、字幕つきのものもあります）。せっかくの機会を活かしてみましょうよ!!　タイ語担当者も、LL 自習室も、タイにチョッとでも興味のあるアナタを心からお待ちしています。タイの微笑や象さんも、アナタとの出会いを待っているかもしれませんネ。

街角の看板：日本企業のロゴはありますか？

遥かなるジャワ

国際コミュニケーション学部
河野　眞

東南アジアの特集号に一言というお誘いであるが、まったくの門外漢である。現在では東南アジアは研究対象として魅力を高めているが、私などが学生の頃は、なお遠い世界であった。もちろん当時でも意識の進んだ人たちは、今日の指標になるような考え方と行動をとっていたであろう。しかし異文化と言えば先ず欧米が頭に浮かぶ平凡な感覚にとっては、東南アジアは認識することのまことに薄い分野であった。むしろそこが意識に入ってくるには、とんでもない迂回路をとったものである。

私が学生の頃に先ず興味をもったのはドイツの古典文学であった。勢いドイツの文化史を追い、思想史上の古典を一通り頭に入れておくことが課せられる。つまりヘルダーの言語起源論が講読のテキストであったり、グリム兄弟の言語研究を多少知っておくことが求められるという状況であった。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトもまた一般常識程度には読むことが義務づけられた古典であった。そのなかに1836年の『ジャワ島におけるカヴィー語について』があり、それが東南アジアを意識させられたほとんど最初のものになった。言語学の専攻ではないので、本論は猫に小判の体にとどまったが、それはあながち咎められることでもなかった。その序文「言語の多様性」は、それだけで独立して思想史的な意義をもつとされてきたからである。いわゆる「カヴィー語研究序説」である。

カヴィー語は古ジャワ語のことで、東南アジアの言語のなかでは例外的に9世紀頃から文献が伝わっている。＜カヴィー＞（Kawi）は、賢者とか詩人といった意味のサンスクリット語のようである。つまり古いインドの言語で表記されたことをすでに呼称が映している。フンボルトの業績のひとつは、それをサンスクリット語の分派とする当時の通説を否定して、別系統の言語であることを解明したことにあったとされる。ちなみに、フンボルトは人間存在と言語の相関の全体を重層的に考察して、後のソシュールとはまったく違った視点に立っているが、また具体的な言語研究の分野でも、印欧語を特徴づける屈折語の代表としてサンスクリット語を、他方、孤立語の代表として中国語を選んで、その両極を基準として言語の世界を考えていたようである。

関心の対象にアジアが入って来るようになった現在でも、東南アジアと聞くと、学生の頃の記憶が先ずからんでくる。ジャワの丹念に蝋をおいて花鳥やワヤンやガルーダを染めた更紗の色彩、蒟醤（キンマ）を容れる竹籠の野趣、それらの故土は、一度は訪れてみたい憧れの土地であるが、同時に「カヴィー語研究序説」が呪文のように封じ込められた遥かな場所なのである。

（カット：河野　眞）

私の中国語教授法
声にだして読む中国語

非常勤講師（中国語担当）
上　野　由紀子

発音は命?!

中国語はほとんどの人が大学で始めて学ぶ外国語である。ところが最近高校時代に勉強したことがある人も見うけられるようになってきた。また社会人向けのクラスでも比較的年齢の若い人（中国語は中高年が多い傾向にある）が増えてきた。中国語のすそ野が以前とくらべずいぶん広がっていることを感じさせる。身近な国の言葉になってきたのだろう。

ところで日本語を母語にする者にとって中国語の発音はとてもやっかいな代物である。なにしろ日本語にない発音が中国語には多くある。（無気音、有気音の区別、そり舌音、鼻母音、四声等）。中国語の共通語（中国語には多くの方言がある）をマスターするため、唇、舌を使って、口のトレーニングが必要となる。

ただしわたしが教えている基礎クラスでは大学で始めて中国語を勉強する人とかつて勉強したことのある人にさほど差が感じられない。むしろかつて勉強したことのある人の中で発音に妙なくせがついてしまった人が見られる。（無気音が完全に日本語の濁音になっているなど）

「発音よければすべてよし」というわけでは決してないが、変なくせのついたまま誰にも指摘されないのも問題である。どのレベルであろうとも自分の発音を常に意識、矯正することが必要である。その意味で時々中国人（共通語が話せる人）に発音をきいてもらうことが外国語を勉強する上では当然必要なことだろう。

くり返す中国語

私は中国語を始めた頃、ある北京帰りの日本人に二週間ほど中国語の発音をみてもらったことがある。彼は生まれも育ちも北京の人だった。とてもきれいな発音で、当時大学で習っていた中国の南方出身の先生の発音とはあきらかに異なっていた。今思えば彼が話す中国語は共通語というより北京方言だった。

中国語の共通語は「北京語の音の体系」にのっとっており語彙や文法でも北京語と共通な部分が少なくはないが、実際純粋の北京語（年齢差もあるが）と共通語にはかなりの差がある。彼は私が使っていたテキストがお気に召さなかったようで「こういう言い方はしない。」とよく言っていた。そう言われてもと私は困ってしまった。このテキストは当時、中国が外国人学習者のために作ったテキストだったのだから。自分が使わない言葉イコール正しい中国語ではないという考えはそれからも多くの中国人から聞かされた。中国は国が広いので話す相手によって中国語（主に発音、語彙）に違いがみられる。その言い方が共通語か方言か、北方的な言い方か南方的な言い方か、話し言葉的か書面語的といった区別は学習する際、ある程度意識しておいた方がよい。

ところで彼は私にこの「北京語の音の体系」にのっとったきれいな発音をマスターさせる術を知らなかった。私は30分ただひたすら彼の後について読んだ。それはとても退屈な作業だった。夏の暑さもあり途中眠くなることもしばしばあった。それでも二週間たつと不安定だった私の発音もなんとなく安定してきた。今振り返れば、繰り返し読むという外国語学習の重要かつ基本的な作業をひたすら行っていたのである。彼自身も自分の日本語の発音を矯正するため、知り合いの店に頼んで、店番として「いらしゃいませ」「ありがとうございます」という言葉を繰り返し練習していたそうだ。私にも繰り返し読ませるのが最善だと思ったのだろう。

自分の口の形を見よう

授業では発音練習を中心にこの口を動かす時間をなるべく多くとりたいと思っている。基本文型を使った置き換え練習や本文を暗唱することで学習者に声を出し疲れてもらうこと（?）を私は自分のモットーとしている。そのため授業中はできる限り学習者に多くあてるようにしている。クラスの人数にも

よるが、最低5, 6回はあてるようにしている。

また学習者が発音する際、なるべく口の形や舌の位置などを具体的に説明するようにしている。耳だけでまねるのはとても難しい。私に発音を教えてくれた北京帰りの先生はただひたすら私に読ませるのみで、口をどのように動かしたらよいかは教えてくれなかった。もっとも、それまで日本人に中国語の教える経験の乏しかった当時の彼には少々無理な注文だったかもしれないが。

声を出す快感

ところで発音練習の際、声が小さい人や声をださない人が多い。よく見ていると、周りの様子をうかがっており、誰かが声をだす様子を見て自分も声をだすようで、自ら声を出すのをためらっている人が多い。語学は合唱の練習ではないのだから、みんなの声がきれいにそろわなくてもかまわない。各自がそれぞれ自分のペースで読めばよいのではないか。

また授業中あてられた時、間違っているのではないかと恐れるあまり、声を出さない人も見られる。間違って答えてもそれは次への上達のステップなので気にしないで声をだしてほしい。(といっても気にする人は気にするかもしれないが) 間違えを正すことは教える側の仕事であり、学習者の中国語の誤りを指摘しているのであって、けっして学習者本人を責めているのではない。教える者にとって学習者の上達をみるのは大きな喜びなのだから。

一方社会人や学生の中でとても声を大きく出し、活発に質問してくるクラスもある。声はそろっていないし、各自マイペースという感じだが、声をだすことにためらいがなく、その声は教壇に向かって波がおしよせてくるように迫力がある。私も大きな声が帰ってくるとうれしくなる。パワーをもらうようだ。職業柄とはいえ授業で大きな声を出すことはカラオケで自分の好きな歌を歌うのと同じくらい気持ちがよい。この快感をこのクラスの人たちは感じているのだろう。

進むべきか進まざるべきか

ところで例年基礎課程で約15課あるテキストは一年間(約26回)ではなかなか終わらない。(最初の4～5回はピンイン(発音記号)の読み方に時間をとられる、)1年間で学ぶべき基本的な文法事項をすべて終えず、次の段階へ進ませるのは教える側としてはとても申し訳ないと思う。読みの練習や復習の時間を減らせば、なんとかテキストを終えることができるかもしれない。しかし1年近くたっても中国語の音節表が読めない、四声が安定しない人も少なくない。進むべきか進まざるべきか、この点はいつも悩むところである。

またテキストの上だけではわからない中国語の雰囲気や背景をビデオなどの視覚的な教材を使って知ることもとても重要である。ビデオ等で中国という異文化にふれることで中国語を外国語としてよりいっそう認識できる。ただし90分の授業の中で前回の復習、暗唱、新しい課の読みの練習、文法説明をきちんとやろうとすると、ビデオ等の視覚的な教材を入れることは時間的にかなり苦しい。それでも時々息ぬき程度に入れるようにはしているが。幸い本校の語学教育研究室にはたくさんの中国語や中国に関したビデオ、テープ等があるのでこれらをぜひ活用して中国語の世界にふれてほしい。

言葉は人と人をつなぐコミュニケーションの手段、道具である。中国語を声にだして読む快感と中国の友人と話す楽しみをぜひ中国語学習の中から感じとってほしい。

ロシア映画への招待
「コーカサスの虜」1996年
監督セルゲイ・ボドロフ

経済学部
清　水　伸　子

ロシア映画といっても日本で公開されたものは、残念ながら極めて少なく、日本人に知られているロシア映画はほとんどないのが実情である。近年日本で上映されて人気が出た子供向け人形実写映画の「チェブラーシュカ」か、「子猫」か、あるいは、かなりの映画通ならばSF映画の祖として有名なアンドレイ・タルコフスキーの「惑星ソラリス」といった映画の名前が挙がればいいところであろうか。したがって、どの映画について書こうかと随分考えたが、今回は「コーカサスの虜」（セルゲイ・ボドロフ監督1996年ロシア・カザフスタン合作）という映画を紹介しようと思う。

戦争映画としての「コーカサスの虜」

この映画はロシア国内で1994年から始まったチェチェン紛争を扱った戦争映画である。1989年に、東西ドイツの壁が崩壊し、ソビエト連邦からリトアニア、エストニア、ラトビアが、そしてその後、ウクライナ、ベラルーシを始めとする旧ソビエト連邦諸国が独立するに至り、1991年秋にチェチェンも独立を宣言する。ロシアは、これを阻止するためにあらゆる手を尽くし、最終的には1994年にチェチェンへと侵攻するのである。1996年8月には独立問題を5年間棚上げすることを決め、いったん和平が結ばれたが、未だ平和的な解決には至ってはいない。

1996年に初めて私はこの「コーカサスの虜」を見たのだが、その時、非常に不思議な映画であるという印象を持った。戦争映画という感じがしないのである。ジャーナリストの林克明氏もパンフレットに「おとぎ話のようであり妙にリアリティーのある映画」であると書いている。

この映画のストーリーは、チェチェン人アブドゥルがロシア軍に捕らえられた息子を救い出すために、ロシア兵士との捕虜交換をしようとすることから始まる。林氏によれば、実際、独立派パルチザンか否かをフィルターにかけるため、チェチェンの若者は何の罪もないままロシア軍に拘束されるということがしばしばあったようである。アブドゥルは、ロシア人の駐屯している街に自由に出入りし、またその街自体には、駐屯しているロシア人兵士もいるが、チェチェン人達も普通に暮らしており、酒屋や靴の修理屋を営んでいたりする。

そして、捕らえられたロシア人青年兵士ワーニャの母親が、息子が解放されるよう捕虜交換を軍に働きかけるためにそのチェチェンの町へやってくる。母親が息子を助けるために単身戦場へやってくるなどということは、敵地に丸腰で飛び込んで行くようなものであり、およそ戦場ではあり得ないことのように思われるかもしれないが、実際にはロシア人である母親達が紛争中のチェチェンへ息子を探しに来るということがよくあったそうである。

戦争状態にある土地というと、殺し殺されるという恐怖感に支配され、町を自由に歩くこともできない閉塞した状況であると思っていたのだが、戦場で

あろうとも人々の生活は存在し、どちらの側にも属さず、ただ家族の身を案じ懸命に日々を生きている人々も多いという現実をこの映画は私達に見せてくれるのである。普通の人の日常生活の中に戦争があるということは、今のところテレビを通してしか戦争を見ない私達には想像できない世界である。1年前に9・11のテロ事件からアメリカがアフガニスタンへ侵攻した様子をテレビで見たが、軍事ヘリが飛びミサイルを打ち込む映像からは見えてこない現実が存在するのである。

この映画には、劇的な展開があるわけではない。この映画が描き出しているのは、政治家や作戦司令本部から見た戦争でもなく、また、戦場で戦う兵士から見た戦争でもない。戦場となってしまった土地に暮らす人々、また、昨日まで戦争と何ら関係のない生活を送っていたのに突然国の命令によって戦場に送られた若者、そしてその家族という庶民の視点から見た戦争が描かれている。

映画「コーカサスの虜」のテーマ

実は、ロシア文学にはこの映画と同名の長編詩と短編小説が存在する。ロシアの国民詩人プーシキンがまず1822年に長編詩「コーカサスの捕虜」を書き、その後レールモントフがやはり同名の長編詩を1828年に書いている。共に、コーカサスの山岳民族の捕虜となったロシア人と、その山岳民族の娘との激しく悲劇的な恋を描いた作品である。しかしながら、この映画「コーカサスの虜」の主たる下敷きとなった作品は、トルストイによる同名の短編小説「コーカサスの虜」である。トルストイのこの短編はコーカサスの山岳民族がロシア人捕虜を金と交換しようとする話であり、このような話をトルストイが書いた理由はひとえにトルストイがコーカサス人に対して良い印象持っていなかったからであると言われている。しかし、映画監督セルゲイ・ボドロフは映画の設定を「捕虜と金の交換」から「捕虜同士の交換」に変えている。ボドロフはその理由を「実際の戦争の真実は片側からだけでは見えてこないからだ」と述べている。映画のストーリーでは結局アブドゥルの息子はロシア人に誤って射殺されてしまい、捕らえられていたロシア人兵士ワーニャの捕虜としての価値はなくなってしまう。捕虜となった息子ワーニャの身を案じる母親は、息子の遺体とともに村に帰っていく沈痛な面持ちのアブドゥルに共感を覚えていたであろう。ワーニャの母親とアブドゥルとロシア人司令官が写るシーンでは、ワーニャの生死を確かめることもなく「必ず報復します」と母親に告げるロシア人司令官だけが、むしろ攻撃の機会が得られて喜んでいるように見え、場違いな存在のように思えてしまう。

「人間と戦争は相容れない矛盾する概念であり、戦争では人間性は失われるというテーマを込めてこの映画を作った。もちろん映画を見たからといって戦争がなくなるわけではない。」とは、この映画のプロデューサーであるボリス・ギレルの言葉である。アブドゥルの息子が誤って射殺されてしまった後、父アブドゥルは捕虜ワーニャをどうするのか。そして、捕虜となったワーニャを慕うようになっていたアブドゥルの娘はどうなるのか。映画の結末はハッピーエンドではない。しかし『「人が人間性を失わない」可能性があることを信じたい』という製作者の姿勢が込められている。この結末に関しては映画を見てほしい。

映画監督セルゲイ・ボドロフは、ロシアの現実の暗い部分を躊躇なく描き出す作品を撮る監督として定評がある。この映画以外にも、「自由はパラダイス(1989年)」や「モスクワ・天使のいない夜(1992年)」などの作品がある。

わたしの外国語修行時代

国際コミュニケーション学部
磯　野　　徹

私は、今でこそ大学で英語の教師をしていますが、大学を卒業してイギリスへ留学する前までの私の英語力はひどいものでした。国際コミュニケーション学部にあるような、「英作文」の授業はなく、英会話の授業も数えるほどしかなかったので、語学の授業＝訳読、という感じで、毎回、当てられて（そして、友人に揺すり起こされて）から辞書をひきはじめる、といった感じでした。このような自分の学生時代を振り返る度に、毎週のように課される英作文のレポートをきちんと提出する国際コミュニケーション学部の学生のやる気と真剣さには、そのような課題を出している張本人ながら、ただただ感心しています。

お気楽な大学生活を送ってきた私ですが、大学卒業後、イギリスのEssex大学大学院へ留学する機会に恵まれました。大学在学中に留学どころか、海外旅行もしたことがなかったので、正真正銘、初めての日本脱出でした。自分の語学力にはかなりの不安がありましたが、イギリスの学期始まりが10月ということで、大学を3月に卒業してからの半年間、Essex大学の付属の語学コースで勉強して語学力を高めればいいから、と周囲から勇気づけられた結果、「とりあえず」行ってみよう、ということになりました。当然のことながら、そう決心した時は、行ったが最後、まさかそのまま7年もイギリスに滞在することになろうとは想像すらしていませんでした。

イギリスに到着した私は、出発前の不安はどこへやら、次の日には興味津々にロンドンを歩き回っていました。観光客が多いせいか、ロンドンの地下鉄は非常に分かりやすく作られていて、別に英語を話せなくても、十分乗りこなせるのです。Essex大学へ移っても、先生方はゆっくりわかりやすく話してくれたので、「これなら何とかやっていけるかな」と思い始めました。しかしながら、そんな甘い考えは、ホストファミリーに会った瞬間に消え去りました。彼らが何を言っているのかさっぱり分からないのです。彼らがスコットランド人だったということを差し引いても、学校の先生が非母語話者用に話す分かりやすい英語と、地元の人が話す、ある意味、本当の英語の差に愕然としました。

語学コースで学ぶうちに先生の話す英語に関しては大体分かるようになったものの、ホストファミリーとは相変わらず意思の疎通に苦労する毎日でした。ただ、その家にも、一つだけ英語のリスニング力アップに役立つアイテムがありました。それは、Teletext付きのテレビというもので、そのテレビを使うと、ニュースや映画などは、難聴者のためにリアルタイムで字幕がでるように設定できるのです（イギリスでは、別に珍しいものではない、ということを後で知りましたが）。その存在を知ってから、リスニング力アップのために、時間があればひたすらニュースを字幕付きで見るようにしました。また、これは語彙数アップにも役立ちました。例えば、7時のニュースを見た後、9時のニュースを見ると、内容は大差がないのに、6時のときとは異なる言い回しを使っていて、大変参考になったのを覚えています。そして、ニュースを字幕付きで見始めてふた月ほどたった時、逆に字幕を邪魔に感じ始めている自分に気づきました。字幕を出すとどうしても目がそちらに向いてしまって画面全体をみることができないということもありましたが、字幕を読んで理解するよりも、耳で聞いて理解する方が楽になってきたのです。この効果は試験の結果にも顕著に現れ、留学する前は全体的に低かった英語力も、IELTSの試験ではリスニングセクションで一番いい点数が取れるようになりました。

国際コミュニケーション学部に入学してくる学生の多くは留学という夢を持っており、私のところにも、どうしたら英語が上手になるのか、と質問に来ます。そのような時は、私は必ず、「英語のニュースを毎日見なさい。ただ、アナウンサーが話している事すべてを理解しようと意気込んで始めると長続きしないので、BGMの代わりのような感じでいいから、とにかく続けることが大切。それによってリスニング力だけでなく、イントネーションもよくなるはずだから」と助言するようにしています。

LL Tea Time

森田正幸的地図

経済学部４年
森　田　正　幸

一年間の南開大学（中国、天津市）への留学は私の実質的・精神的両面の地図を拡げる体験となりました。実質的な地図の拡大は、日本から一度も出たことのなかった私が外国である中国へ行き、中国国内でもたくさんの地方に旅行することによって得られました。精神的な地図の拡大とは、中国をはじめとする諸外国の人々との交流を通して得られたものです。両面の地図とも少し勇気をだして、一歩日本の外に足を踏み出せば容易に拡がるものだと私は考えます。その一歩を踏み出した先は、政治・文化・経済・言語など私たちが今まで育ってきた日本とは大きく異なる世界です。この日本とは異なる世界の情報は、グローバル化された現在にいたってはマスコミ、インターネット、書籍などを通してその国の状況は瞬時に日本に伝えられ、私たちは日本にいながら知ることが可能になりました。しかし、そのように間接的に伝わってくる情報はあくまでも他者のフィルターに通された情報です。直接一歩を踏み出して得られるものは体験です。文字通り自分の体で得た経験、自身のフィルターしか通っていない情報は非常に貴重なものとなるのです。留学中に私は南開大学の客員教授も務めていらっしゃる日本のある政治家と一緒に食事をする機会がありました。その政治家の方の好きな言葉の中に「一月三舟」という言葉があります。「一月三舟」とは仏教で使われる言葉であり、意味は「一つの月を、北に行く舟から見ると北に行くように見え、南に行く舟から見ると南に行くように見え、止まっている舟から見ると止まっているように見える」とされています。一つのこともそれぞれに異なって受け取ることができ、いろいろな見方をすることができる教えとして伝えられています。この言葉を拡大解釈すれば次のようなことが言えるのではないでしょうか。「一つの舟から見た感想より、三つの異なる舟から見た感想のほうがより適切に一つの月を表すことができる」。つまり私が言いたいこととは他者（マスコミ、インターネット、書籍等）のフィルターを通して得た情報、その国で生活してきた人から直接的に聞く情報、そして自身のフィルターしか通していない情報の三つの視点からの情報を得ることにより適切・詳細にそのものを知ることができるということです。その意味において、私の留学生活は「留学以前に国内で得ていた情報・留学中に出会った先生、友人から聞いた情報・自分で体験して得た情報」の三点から中国を知ることができ、一つの方法、二つの方法でしか情報を得ていない人より、適切・詳細に中国というものを理解することができたと感じています。

世界全体を「月」とするなら、私は行ったことのある日本・中国・韓国の三舟にしか乗っていません。より世界の状況を知るために、見るために、理解するために私はこれからも数々の舟（アメリカ大陸諸国、東西ヨーロッパ諸国、中東諸国、東南アジ

ア諸国）に乗りたいです。そして、自分の地図をより適切・詳細に、より大きく拡げていければと思っています。

これを読んでいただいた学生の皆さんに留学の良さが伝わったでしょうか？　まだ、舟に乗る気持ちになっていない学生には、学生生活の中の選択肢の一つに留学というものを付け加えていただきたいです。そして、もう舟に乗る準備ができているという学生には他国という「月」を見る（与えられる）だけでなく、日本という「月」が見せられる（与えられる）ように準備を進めていただきたいと思います。

チェコの復活祭

文学部３年
松　本　友　紀

私は、昨年の3月31日から4月7日までの約一週間、チェコ共和国に行く機会がありました。目的は、観光と一昨年の夏にフランスでの“ワークキャンプ”で知り合った友達に会いに行くことでした。

そのフランスでのワークキャンプには他の国々からの参加もあり、スロヴァキア、トルコ、フランス、ベルギーというさまざまな国の人に出会うことができました。私は、そのチェコの友達と出会うまでは、ヨーロッパに興味があったものの、実際にはフランスやイタリアなど西欧と呼ばれる国々にとても夢中になっていました。しかし、ワークキャンプで知り合った友達の中でも、チェコの二人、スロヴァキアの一人と仲の良い関係になり、彼女達に出逢ってその人柄に惹かれチェコ共和国という国についても興味を持ち始め、今回この三人に会いにチェコ共和国へ行く事を決めたのです。

チェコに立ち寄るのは、ヨーロッパで語学研修を受けた後という予定にしていましたから、チェコに立ち寄る日にちに関してはあまり深く考えずに決めてしまっていました。しかし、実は、行って初めて気がついたのですが、私がチェコに入った3月31日というのが、イースターの日だったのでした。そして、これが幸運となって、はるばる隣国のスロヴァキアの友達が、チェコに来ることが可能となったのです。チェコのプラハの空港で会えた時は、もちろん約束もしていましたし、“着けば必ず会えるにきまっている”とそれまでは冷静でいたにもかかわらず、本当に思わず涙ぐんでしまうほど感動してしまいました。

そしてその晩、プラハから車で30分くらいのところにある KLADNO という町に住んでいる友達の家に泊めてもらいました。そしてあくる日、朝食をとっていると友達がイースターのある風習について教えてくれました。それは、「イースターの後の月曜日には、男の子（人）たちが、木か草からできた棒らしきものを持って女の子（人）たちのところへお菓子をもらうために来る」というものでした。そして、男の子（人）たちはその棒らしきもので女の子（人）たちを“ビシッビシッ”とたたくのだというのです。「それは、そのたたかれる人の健康と幸運を祈ってたたくのよ。でも私は今まで復活祭の時にはコテージで過ごした事しかないからこの辺はどうかはわからないけどね。」と教えてくれました。（私が思うに、多数のチェコの人はコテージを持っているようでした。友達のお父さんは、金曜日にはプラハ中心へ向かうのとは反対方向の道路をたくさんの車が走り、それらはコテージに行くのだと教えてくれました。“なんともうらやましいなぁ”と思いつつも、こんな所でも日本と生活のスタイルが違うのだなぁとしみじみ感じました。）

チェコ KLADNO 近くのレストランにて夕食

私は、そのイースターの風習について期待しながらも、きっと伝統的なものでめったにそういう場面には遭わないだろうと思っていました。ところが、家（マンションのような所でした。）を出て駐車場へ向かう途中、目の前をそのたたき棒らしきを持った数人の男の子達が通り過ぎるではありませんか。まさかこんなに早くに出会うとはっ！！本当に驚きました。そして、車に乗り込もうとしていた時に、別の、今度は40歳くらいの子供連れの人たちに会いました。そして、目が合うとニヤリと笑いこちらへやって来て“ビシッビシッ”と私達みんなの腰の辺りをたたきました。この棒は、多少しなしなしていたので、この初めての経験は、思ったより痛くありませんでした。そして、出かけた先でも、もう一人、私達を“ビシッビシッ”とやってくれました。そして、このおじさんは一人の子に何かぶつぶつ言いながら、その子だけは他の子よりも長く叩いていました。後で友達に聞くと、詩を読んでいたらしいのです。そして、さらに驚いた事は、叩き、叩かれる人たちの関係は見ず知らずの人同士だったということでした。結局、私が叩かれたのはこの2回だけでしたが、本当におもしろい経験でした。

そして、さらに別の友達が、ある年の復活祭の間、男女のグループでどこかへ出かけていた時に、男の子達がその月曜日の深夜0時になって、とたんに女の子達を起こして叩きに来たという思い出話もしてくれました。昔は、女の子達はその仕返しにバケツの水を男の子達にかけるといった豪快な仕返しもしたのだそうです。しかし今では、さすがに家の中では水浸しになってしまうからできない…どうしろというのか?!　と、言っていました。

イースターの時期には町も飾り付けられ、店先にはイースターエッグがみられます。スーパーマーケットにも大量の卵型、うさぎ型のチョコレートがいっぱい置いてあります。そして、チェコでは、羊の形をしたパン（ケーキに近いような）をイースターに食べるのだそうです。もちろん、その羊の形のパンはスーパーマーケットでも売られていました。一つ一つが私にはとても興味深いものでした。

私は、それまで復活祭というものを経験した事がありませんでしたし、復活祭についてもあまりよく知りませんでした。復活祭についてあまりよく知らないという点に関しては今でも変わりませんが、チェコを訪れたことにより、世界には色々な慣習があり、各々の国によってその慣習も違うのだという事を知りました。また、復活祭以外の日のチェコや、チェコ以外の国の色々な事を経験しに、外国へ行きたいと思っています。

私の場合は、その人に興味を持ったのでその人の国にも興味を持つようになったという単純なきっかけでしたが、今でも、なぜそれまでこうした国々のおもしろさに気がつかなかったのだろうと不思議に思います。彼女達に出会えて本当に幸せです。Ahoj！

友達（スロヴァキア）のお母さんのお友達が作った、イースターエッグ。とてもきれいで、本物の卵から作られている。中身は、模様として開けた本当に小さな穴から出した!!　らしい（?）。

愛知大学言語学談話会　―第28回―

公開講座「言語」2003 プログラム

＜前期＞ 愛知大学豊橋校舎研究館2階会議室
　　または5号館4階541会議室
＜時間＞ 14：30 ～ 16：30

①4月19日㈯　於　研究館2階会議室
「大衆小説の作り方― A. デヌリー『神様の思し召し』(1889) を例として―」
　加藤俊夫（愛知大学名誉教授）
②5月10日㈯　於　5号館4階541会議室
「ヨーロッパ中世における知的遺産の継承
　―アルクインとカロリンジャン・ルネッサンスの場合―」
　田本健一
　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
③6月７日㈯　於　研究館2階会議室
「初期英和辞典の編纂法」
　早川　勇（愛知大学経済学部教授）
④6月21日㈯　於　研究館2階会議室
「EU における言語政策―ギリシャの外国語教育―」
　平尾節子（愛知大学法学部教授）
⑤7月5日㈯（2講義開催）　於　研究館2階会議室
「夏目甕麿（みかまろ）『不尽の烟』における万葉語彙について」
　小池保利（豊橋技術科学大学非常勤講師）
「漢字文化圏における「表音」文字の背景（その3）」
　陶山信男（愛知大学名誉教授）
⑥9月20㈯
「「言語的シンボル」について」
　伊藤忠夫（中京大学教養部教授）

＜後期＞ ナオリ会館　名古屋市東区代官町
＜時間＞ 14：30 ～ 16：30

⑦10月4日㈯
「看板広告における経路探索の方法」
　片岡邦好（愛知大学法学部助教授）
⑧11月8日㈯
「ドイツ語と英語の並列関係について」
　トーマス・M・グロース
　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
⑨12月6日㈯
「文法と文脈―談話情報が動機づける統語構造―」
　須田淳一（愛知大学短期大学部助教授）

2004年
⑩1月10日㈯
「言語学という思想―ソシュールとサピア―」
　高橋秀雄
　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）

外国語検定試験合格者に奨励金を贈ります！

語学教育研究室では外国語検定試験合格者に奨励金（図書券）を贈る自主学習支援の制度を設けています。2002年度は延べ89名の学生に奨励金が贈られました。

2003年度も下記により受付しますので合格者は申し出てください。

記

1. 対象学生
愛知大学豊橋校舎学生及び短大生（大学院生、オープンカレッジ生、科目等履修生、研究生は除く）

2. 奨励基準
追って教務課および LL 自習室の掲示板に示します。

3. 受付期間
2004年1月15日㈭～ 1月31日㈯

4. 手　　続
学生証および合格通知書を3号館 LL 自習室カウンターまで持参し、申し出る。

5. 奨励の対象
2003年2月～ 2004年1月の間に合格した分に限る。

お知らせ

豊橋語学教育研究室のホームページを開設しました。
アドレスは以下の通りです。
http://taweb.aichi-u.ac.jp/tgoken/

LL 自習室を利用される皆さんからの投稿をお待ちしています。
次号の原稿締切は7月です。